

KYOTO

BRICOLAGE OF LIFE

vol.1 霧夕香

Where does your inspiration come from?
さまざまなジャンルで活動する人たちの生き方を収めるシリーズ
(Bricolage of Life).
誰かの人生も、あなたの人生の一部なのかもしれない。

10/30/2024

「自分の身体を“年画”のように感じて苦しくなる時期がありました。でもそれが自らの“境界”を探るきっかけになりました。」

日本画の画材を用いて描く、ペインターの霧夕香さん。人の身体や植物の身体性を想像しながら、時に互いが溶けて混ざり合う様子を描いている彼女に、これまでの道のりや日本のアートシーンについて話を聞くべく、京都にあるアトリエを訪れた。



小さい頃からずっと絵を描くことが好きだった。中学の頃は水泳部、高校ではダンスとその時々で美術のあることをやってきたが、絵を描くことが一番得意だったことは必ず認める。高校卒業後は美術大学に進学。当時は画家になるという明確な目標があったわけではなく、一番得意で好きな科目である美術を学ぶという選択だった。



修士2年でパリへ留学。それまで作家としてのキャリアは全く想像できなかったという彼女を次々く変える存在に出会う。作家を目指す現地の学生たちと、機能的にギャラリーで展示をし、絵が買われていく光景を目の当たりにした。

「買ったのは生徒の作品を買う美術の教員がいたり、学生のアトリエや展示を見て作品を買うコレクターがいることです。その中で卒業後も作家として活動することを自然に目指す人達をみて、自分も作る生活を続けたいと思うようになりました。」

帰国後、その思いが知らずも次につながっていく。卒業制作展を見たギャラリーからのオファーを機に作家として美術の道を歩いた。先のことはいずれも見えてなかったが、とりあえず描くことを続けてみないとはいえないような気がした。

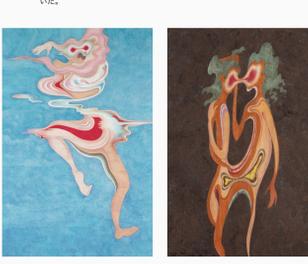


現在はモチーフとしている“身体”は、彼女にとって大切なテーマだ。描き始めたきっかけは、彼女が大学院1年目に経験した「閉塞感」だった。

「窓がないだけで息ができないように感じたり、閉じ込められているように感じたり、「自分はのしんどい身体から抜け出せないんだ」と思うと、自分自身も嫌いなようになってしまいました」



そんな折、読んでいた本の中で「日本人は体や言語が非常に曖昧である」という語に出会う。古典に登場する「美しい體が空を舞う」といった表現の語彙が、今の自分を表現するのみに「美しい体」など現代の感覚とは異なるものの、内側と外側に対する感覚に共通する自分があった。



「この身体を表現しているけど、実は自分を認める境界というのはなくて、もっと曖昧で外に開いているのかもしれない。と考え方を委ねたらすこく救われる気がしました。そこから“境界”をテーマに、高概念的で何かと混ざり合うような身体を意識的に描くようになりまし



さらに近年では、同じ“境界”というテーマで植物も描いている。

「植物の構造は人間でいうところの腸の内側を剥き出しにしている状態なんだそうです。人間にとっての内側が外側であることで、他の存在と隔りなく触れ合える植物に対して憧れのようなものを感じて、身体と植物がまざり合う今の表現につながっていきまし



筆で描かれる線の緊張感、落ち着いた色。そしてその混ざり合う様に、霧夕香は自らも、想像を膨らませる。そんな創作の軌を描く彼女は、何よりも「自分が共感できるもの」を描きたいと言う。

「自分がしっくりくるもの、ちゃんと美意識を持っていないと全然どんな風になってしまっんです。上半身よりも共感できる感覚が大切。すこくリアルなのに、匂いしそうにない程の暖かいなのは描きたくないですね。互いの美意識を大切にしたいし、それは人に伝わると思っています」



伝え方に気を配るのは、インスタビュの時も同じだった。じっくりと考えてから自分の言葉で語る姿は、彼女の誠実さをよく表していた。

「作家が作品について全てを言葉で説明しないといけないとは思っていませんが、自分の体験や感覚から興味を持って作品に繋がることが多いので、言葉で伝えることも大事にしています。作品は技術だけでも成立しませんが、言葉だけが成立しません。言葉にできないところは自分でも予期しなかった偶然性も含めて、完成するのが面白いです」

作品は自分で完成するものではないと考えているからこそ、「現場は人それぞれで、その感覚を多くのが見たい」と霧夕香はいう。日々自分と対話し、描き続けることで他者と交わる。彼女が大切にしている曖昧さや偶然性が、作品と人生にどんな変化をもたらしていくのか、今後も目が離せない。❤️



霧夕香 Yuka Mori
1991年、大阪府生まれ。高賢美術育ち。2015年/パリ国立高等美術学校渡辺美術学。2016年/京都市立芸術大学大学院修士課程/日本美術家連。現在は東京都を拠点とする。主催展覧会に「展覧-霧夕香展」(GALLERY SUJIN、2019年)、「二人展-流転するあいづち」(LOKO gallery、2021年)、「展覧-腸中の肖像」(同時代ギャラリー、2021年)。など。アーティストレジジダンスや国内外のアートフェアへも多数参加。9月20日から始まっている「霧の芸術祭 霧の展-霧山」に参加中。

text & photography | Taro Ikeda

BRICOLAGE OF LIFE | アーティスト | ペインター

京都 霧夕香 池田太郎 画家

RELATED STORIES

- KYOTO**
和紙職人がつくる新しい常盤
ハタノワタル
- TOKYO**
アートで勝負して来た
加藤典
- MIYAGI**
佐野美里 (彫刻家)
自然との対峙から生まれるア
ート
- OKINAWA**
アートを軸に人が集い、宮古
の文化を形作る場所に
キヤリール「ALL」 石川直
樹、新城大地郎

VIEW MORE ARTICLES